

## 100年後の夕日

松本 由利子 (まつもと ゆりこ/コンサベーション・インターナショナル・ジャパン)

もし100年後の未来にタイムスリップしたら、その世界をどう思うのだろうか？逆に100年前の時代の人々が現在にやって来たら？やや大げさではあるが、以前それに似た錯覚に陥った瞬間がある。ウガンダ僻地の農村に行った時と、日本に戻ってきた時のことだ。その時感じたことを書いてみたい。

## 【現代から過去の世界へ

## 【日本から ウガンダの農村へ】

ウガンダ北部地域、南スーダンからの難民を受け入れているその地域は、アフリカの中でも極端に貧しい地域だった。大平原に草葎の家が点々と散っている。電気、インターネットはなく、水も川や井戸から汲んでくる。何より驚いたのは所有物の少なさで、子どもたちが1セットしかない服を川で洗い、乾かす間泳いで過ごす姿をよく見かけた。これを先ほど「貧しい」と表現したが、今日の多くの先進国でも100～200年遡れば同様の生活を送っていた経験があるはずで、過去の先進国の姿が現代のウガンダ北部に残っている、そんな風にも言えるかもしれない。

この大草原での生活にどっぷり浸っていて、強く感じたことがある。それは、ここで暮らす人々が「人間らしい」と思ったこと。自然の流れの中で、人間が等身大で生きている。感情表現が豊かで、視力や身体能力が高く、生活の知恵に長けている。トラブルが発生すると、人が人を呼び、みんなで意見を寄せ合って解決法を探す。物質的に頼れる術が限られる分、人間自身が持つ力が最大限に発揮されていて、日常の小さな場面で人間の新しい姿にハッとさせられることが多かった。私も真っ赤に染まる夕日を見ながら一日の活

動を終えると、自分がしっかり大地の上で生きている新鮮な気持ちになった。

## 【過去から現代へ

## 【ウガンダから日本へ戻った時】

前述したようなアフリカの大草原から日本に戻ると、かつて住み慣れた世界が違った角度で見える時がある。最近衝撃的だったのが、帰路に寄ったシンガポール空港に昨年誕生した「ジュエル」だ。空港のターミナルを結ぶ空間に、熱帯雨林と人工の滝が中央を貫く巨大なショッピングモールが登場する。これを見た時、正直すごいと思うより違和感のようなものを感じた。世界では難民や貧困、気候変動など問題が溢れているのに、人間はこういう物質的な豊かさを求め続けるのだろうか。キラキラ輝くショッピングモールと買い物に忙しい人々を眺めながら、ふと人間が天まで届く塔を作ろうとした「バベルの塔」の話を思い出した。

日本社会に戻ると、便利な生活の中に気になることが多い。過剰な包装、行き過ぎた冷暖房、大量の食品廃棄物など。また、恐ろしい勢いでIT化の波に飲まれ、望まずともITに頼らざるを得ない生活を送っていること。改めて見直す日本は、より便利で快適な社会に向かって直線的に発展しているように思う。しかし、その発展の方向は物質への依存度を高め、自然の中で生きていく力を自ら弱めていくことになりはしないか。東日本大震災の時、最終的に人の命を支えることになったのが、人間同士の繋がりだったという話が忘れられない。

100年後の未来では、どんな気持ちで夕日を眺めているのだろうか。アフリカでの日々を懐かしく思い出しながら、そんな想像をしてみた。